

<学術論文>

地方都市の中山間地域における子育てと子育て支援の特徴 —市街地との比較からみえる「地域の見守りとゆるやかなつながり」—

西 朋子
三宅公洋
友川 幸

信州大学教育学部
信州大学教育学部
信州大学学術研究院教育学系

キーワード：中山間地域, 子育て, 子育て支援, ソーシャル・キャピタル, 子育ての社会化

1. はじめに

日本の人口は、2005年から減少局面に入っている。人口構成は、子どもの数が少なく高齢者の割合が高い少子高齢社会である。松田（2013,p.148）が「都市の低い出生率が地方の高い出生率で相殺されることによって、国全体の出生率がある程度維持できた。しかし、近年地方の出生率が低下した」と指摘しているように、日本は人口減少の新たな局面に入ろうとしている。

国土交通省(2003)によると、日本では1950年代からほぼ継続して地方から都市へ人口は移動していることが報告され、山田(2007, p. 27)でも「人口を維持できる都市部と、若者や子どもが減り、過疎化、高齢化が進む地方との二極化が生じている」と指摘されている。実際に、国土交通省(2006)によれば、平成17年時点で日本の面積の64.8%、人口で13.6%を占める地方都市の中山間地域^{注1)}において、人口減少が特に急速に進行すると予想されている。

以上を考慮するならば、このまま人口減少が続くと、地方都市や中山間地域において、公共サービスや基礎インフラ等の生活基盤の維持が難しくなると予想される。そのため、人口減少を食い止めることが緊急の課題となっている。こうした中、地方都市の人口減少を緩和させる方法として、廣嶋(2016,p.57)は「地方の競争優位の創出」の重要性を指摘している。そして、その内容として彼は、夢と可能性を保障する就業機会、快適な住環境、豊かな自然、温かい人間関係を挙げている。人々が充実した生活を地方で過ごせること、特に次世代を育てられる環境があることがポイントとなっている。ここから「子育てのしやすさ」も重要なファクターであると判断でき、その実証的な検討が重要になる。

「地域と子育てのしやすさ」に着目した先行研究には、富山県と福井県を比較した量的調査がある(中村, 2016,p.34)。この研究では、居住地域において、①女性が就労しやすい環境にある場合、②地域の経済展望に不安が少ない場合、③子どもの世話をしてくれる人の数が多い場合、④子どもについての価値観が伝統的である場合、⑤居住状況(祖父母と近居・同居)である場合、子育てしやすいと感じる傾向が示された。また、「地域と子育て支援」に関連する研究では、立山(2010,p.86)が、都心・郊外・村落で母親が受ける子育て支援の多寡を比

較し、都市度は夫の子育てサポートの多寡と直接関連していないが、都市度と関連する夫の就労スタイルは郊外在住者を中心に長時間労働や長時間通勤であり、夫は子育てのサポート資源になり得ていないことを明らかにした。また、岩間(2004,p.168)によると、大都市・地方都市の2地点を比較した研究では、大都市においては母親1人による子育てが中心なのに対して、地方都市においては母親が夫や親族と子育てを行っていることが指摘された。

このように地域と子育てに関する先行研究では、都会と地方都市の比較を通して、子育てのしやすさの条件や、夫や親族による子育て支援の多寡が研究されている。一方、特に人口減少が進む地方都市の中山間地域の状況については、地方という区分で一括りにされ、詳細は明らかにされていない。また、両親や親族による子育てに重点が置かれ、現在拡大している行政等による子育て支援と両親による子育ての相互関係が分析されていない。

そこで本稿では、地方都市の中山間地域における子育ての現状と、行政等による子育て支援の現状を聞き取り調査によって把握し、利用者の希望する支援と提供者が提供する支援内容とのずれ、さらにソーシャル・キャピタルに着目した中山間地域における子育ての社会化の現状を明らかにすることを目的とした。

本稿においてソーシャル・キャピタルに着目する理由は、今後一層子育ての社会化を推進していくためには、子育てに活用可能なソーシャル・キャピタルについて検討することが重要となると考えるからである。1980年頃から日本では全世帯の6割が核家族となっており、さらに子育て世代では、女性の就業が7割を超え、家族形態の変化や女性の社会進出が進む状況である。このような状況をうけて厚生労働省(1994)は両親や親族による私的な子育てのみならず、公的な機関による公的な子育て支援の充実を掲げ、内閣府(2003)は地域が持つソーシャル・キャピタルを生かした子育て支援の充実を重要な課題として位置づけている。これまでの子育てにおけるソーシャル・キャピタルに関する研究では、地域にソーシャル・キャピタルがあることにより子育ての社会化が促進されること、また、子育て支援活動が地域のソーシャル・キャピタルを育てることが示されてきている。ソーシャル・キャピタルと子育ての社会化に関しては、地域の中でつきあい・交流があると地域全体で子育てをしようとする意識や行動にプラスの効果があることが指摘されており(山口, 2013,p.69)、ソーシャル・キャピタルの構成要素である地域のつきあい・交流が「子育ての社会化意識・行動」に影響を与えていることが明らかにされている。また、子育て支援活動の促進によるソーシャル・キャピタルの醸成や活性化も報告されている(齋藤, 2008,p.71)。しかしながら、公的な機関による公的な子育て支援についての研究は、都市部では研究が進められてきているものの(岩間,2004)、中山間地域を対象とした研究は、十分に進められていない。中山間地域は、子育て環境として、競争的優位性を確保しうる豊かな自然環境を有しており、また、温かい人間関係が存在すると言われているが(廣嶋, 2016)、中山間地域の持つ子育ての特徴や利点を生かした子育て支援の在り方や課題については十分に明らかにされていない。また、都市部での家族形態の変化や女性の社会進出のように、中山間地域においても保育者をめぐる社会的な変化が生じている可能性があるが、中山間地域における行政機関による

地方都市の中山間地域における子育てと子育て支援の特徴

子育て支援の利用状況, それに関連した「私的な願いを公的な必要に変換する」(ガート・ビースタ, 2015, p.156) 子育ての社会化の進行状況, 子育てとソーシャル・キャピタルの関係性については十分に明らかにされていない。

2. 対象と方法

2.1 対象地域

本研究では, 中核都市のA市および, A市に含まれるK中山間地域を対象地域とした。中核都市のA市は県庁所在地であり, 2014年の人口は約38万5千人, 高齢化率は26.8%, 合計特殊出生率は1.49であった。A市は32地域で構成され, そのうち13地域が中山間地域である。1999年の合併により中山間地域は9地域から13地域に増加した。A市の2014年度の待機児童は, 厚生労働省(2013)によるとゼロであった。

K中山間地域は市街地から20キロメートル離れ, 2014年時点の人口は約1500人, 世帯数は約700, 高齢化率は53.7%, 山々に囲まれた, 少子高齢化が進行する典型的な中山間地域であった。A市の報告書によると2005年から2011年の6年間で575人の人口減少があった(A市, 2015)。K中山間地域には公立の保育園や小・中学校があり, 農産物生産や観光資源にも恵まれ, 地域のインフラや産業の基盤を維持していた。

A市に13ある中山間地域のうち, 核となる市街地と隣接せず, さらに地域の支援主体である保健センター(A市全体で11箇所)の管轄がそれぞれひとつの中山間地域に限定されている地域は3箇所であった。その中で, K中山間地域は2005年A市への合併を機に, それまで村民が培ってきた子育てに関する細やかな配慮を継続できるように, 住民自身が子育て支援グループを立ち上げるなど, 行政と住民が共に子育て世帯への支援を進めてきたことが事前調査からわかった。K中山間地域がA市中山間地域の中で, 最もこの傾向があるとは言いつねないが, 子育て支援に力を注いできた地域であると判断し, その積極性と先進性に注目し調査対象とした。

K中山間地域の特徴を明らかにする比較対象として, A市の市街地において子育て中の人々からも聞き取り調査を行った。

2.2 対象者

本研究では, 子育て支援を利用する側と提供する側の両者から聞き取りを行った。表1は調査対象となった子育て支援利用者の一覧である。K中山間地域には, 調査時点で3歳未満の子どもを持つ世帯が11世帯あり, 保健師を通してそのすべてに対して調査の協力を依頼し, それに応じた5人に対し聞き取り調査を行った^{注2)}。

市街地の聞き取りは, 中山間地域の特徴を見出すための比較対象として, 両親がいる, 夫が有職である, そして3歳未満児を持つ条件を満たす世帯に対して, 雪だるま方式^{注3)}で合計5人に対しておこなった。

3歳未満児を持つ親に対象を絞った理由は, 母親が子どもと過ごす時間が最も長く, 子どもは親等の庇護の下でなければ生きられない時期だからである。さらに2012年発表の厚生

労働省の全国調査によると、2010年生まれの子どもの母親は、専業主婦と出産前後で仕事を辞めた人をあわせると、生後6か月では63.7%、1歳6か月では57.4%、2歳6か月では53.1%が職業を持っていなかったことから、3歳未満児を持つ母親の5割以上は終日子育てをする人々であり、子育ての課題が凝縮されている時期であると判断したためである。

表1 調査対象者（子育て支援利用者）の情報

No.	地域	性別	職業	子ども数	家族形態	支援する親族
1	中山間地域	母親	無し	1人	核家族	なし
2	中山間地域	母親	無し	1人	核家族	隣市・本人両親
3	中山間地域	母親	有り	1人	核家族	同市・本人両親
4	中山間地域	母親	有り	3人	三世代	同居・夫両親
5	中山間地域	母親	無し	2人	三世代	同居・夫両親
6	市街地	母親	育休中	3人	核家族	隣市・本人両親
7	市街地	母親	無し	2人	核家族	同市・本人姉
8	市街地	母親	無し	2人	核家族	同市・本人両親
9	市街地	母親	無し	3人	核家族	同市・夫の叔母
10	市街地	母親	育休中	1人	三世代	同居・夫両親

表2は、対象となったA市における代表的な子育て支援サービスの提供者の一覧である。子育て支援の提供を直接行っているA市の市役所、A市での子育て支援を直接行っていないが少子化対策関連事業を行っている県庁、K中山間地域における子育て支援を担当する保健師、A市中山間地域に立地する幼稚園入園前の子育て支援施設、A市と最も活発に子育て支援を協働で行っているNPOから聞き取りを行った。

表2 調査対象者（子育て支援提供者）の情報

No.	組織・施設名	聞き取り調査の対象
11	A市役所	こども政策課男性2名、保育課男性1名・女性1名
12	県庁	次世代サポート課男性1名、こども・家庭課男性1名
13	K中山間地域保健センター	保健師女性1名
14	K中山間地域子どもプラザ	施設長女性1名、スタッフ女性2名
15	子育て支援施設	スタッフ女性1名（K中山間地域の隣接中山間地域）
16	NPO（子育て支援関連）	理事女性1名

2.3 調査方法

2014年11月～2015年1月の期間に、対象者への半構造化インタビュー^{注4)}による聞き取り調査を行った。地域と子育てに関する文献レビューから得られた情報に基づき、インタビ

地方都市の中山間地域における子育てと子育て支援の特徴

ユーの聞き取り項目を設定した。聞き取りを行なった項目は、子育て支援利用者に対しては、①家族形態、②家族成員間の育児分担、③親族等の支援の有無、④行政とNPO等から提供されている子育て支援サービスの利用状況、⑤子育ての課題の5項目とし、子育て支援提供者に対しては、①支援サービスの具体的内容、②支援サービスの利用状況、③子育て支援の課題の3項目とした。尚、本研究は、2014年11月に信州大学倫理審査委員会の了承を得て行った。

2.4 分析方法

文献レビューで収集した情報、および、聞き取り調査により得られた情報から、行政・NPOによる公的な子育て支援事業のサービス内容やその利用状況を整理するとともに、子育ての実情に関わる情報を、親族による子育て支援と親による子育て状況に分けてまとめた。また聞き取りで得られた質的データについて、定性的コーディング^{注5)}（佐藤, 2008）により分析した。

3. 結果

調査データを、①親による子育てと親族による私的な子育て支援の提供、②行政やNPOによる公的な子育て支援の状況、③K中山間地域における子育てと子育て支援の特徴の3つの視点でまとめた。本稿では、行政やNPOが行う子育て支援を公的な支援、親族が行う子育て支援を私的な支援と表現している。

3.1 親による子育てと私的な子育て支援の提供

まず、家庭の子育て状況を見てみると、母親が中心で、父親は部分的関与という、従来の性別役割分業による子育てとなっていた。また、親族による支援を受けている人がほとんどであり、子育ては社会化されていなかった。

(1) 母親中心の子育て

子育てを中心に担っていたのは、調査対象者10人（K中山間地域5人、市街地5人）全てにおいて母親だったが、K中山間地域の父親による子育て参加への言及は、5事例中の全てにあった。

No. 3・K中山間地域

「だんなは言ったことはやってくれるけど、言ってやってくれないよりはいいと思うけど、やっぱり違う。」

No. 5・K中山間地域

「夫は子育て、だんなもまだ若くていろいろある。私は子育てに関して父親の意地みせてとか、いろいろ言っている。26歳だからまだ若い。」

母親は父親の子育て参加に満足はしていないが、父親が部分的であれ子育てに参加していることに、ある程度満足している様子も以下の語りからわかった。

No. 1・K中山間地域

「夫は子どもに関して（日常の子どもの世話は）はやってはくれないけど、遊びにい

ったりするのとか、分担してやってくれる。」

No. 2・K中山間地域

「ちょうど子育てにかかわれるときに（夫と）一緒にいられた。夫の参加は、わりとやってくれる。お風呂は毎日（子どもと入ってくれる）。夜だけは（子どもが夜泣きしても夫は）寝てしまう。」

市街地における父親の子育て参加は5事例中の4事例であり、父親による子育ては部分的であった。以下の語りから、家族によって参加の程度は異なることがうかがえる。

No.6・市街地

「夫は市内で仕事、夫婦の分担は、結構、主人はやってくれるが、実家の親に今までは頼んでいた。お迎えとか病気の時とか。夫には仕事が始まってしまうと何か困っても帰って来てとは言えない。」

No. 7・市街地

「夫は子どもの歯磨きなどいろんなことをしてくれる。」

No. 10・市街地

「夫の出番はお風呂だけ。」

(2) 親族による私的子育て支援の提供

調査対象の10人中9人が、親族から子育ての支援を受けていた。中山間地域、市街地ともに親族からのサポートは日常的な行為であった。具体的には祖父母から支援を受ける場合が多く、それ以外では、姉妹からの支援1名、その他の親族からの支援が1名であった。対象者の居住形態は同居3人（K中山間地域2人、市街地1人）、別居6人（K中山間地域2人、市街地4人、全て車で1時間以内）であった。サポートを受けていない1人はK中山間地域のIターン者であった。親族による主な支援内容は、下の子の急な発熱のために上の子どもを短時間預かるなど、緊急な要請に応じる支援であった。

3.2 公的な子育て支援のサービス内容と調査対象者における利用状況

(1) 公的な子育て支援のサービス内容とその利用状況

A市において、行政やNPOが単独あるいは協働で3歳未満児とその保護者に対して提供する主な子育て支援事業は、調査時点で、子育てそのものを支援する一時預かりやファミリーサポート、交流と学びの場を提供する地区主催の催し、情報の提供、子育て相談など8領域であった（表3）。

本稿では地域における直接的子育て支援に的を絞ったため、就労支援、母子保健、社会的養護、経済的支援等の間接的な支援は対象外とした。

地方都市の中山間地域における子育てと子育て支援の特徴

表3 A市の3歳未満児対象の公的な子育て支援事業名と主なサービス内容

No.	事業名
1	一時預かり（11カ所の指定保育園, K中山間地域にはない）
2	ファミリーサポート（子育ての相互援助活動, 市街地に本部）
3	子育て相談（電話・面談による子育てに関する総合的な相談, 市役所にて開催）
4	各地区住民自治協議会主催の子育て・子育て支援（18地区/全32地区中）と各地区公民館主催の交流や学びの場（24地区/全32地区中）
5	ショートステイ（養育が一時的に不可能な場合, 児童養護施設や乳児院で養育するサービス, K中山間地域にはない）
6	トワイライトステイ（保護者が仕事等で不在のため, 平日夜間や休日に児童養護施設において一時的に預かるサービス, K中山間地域にはない）
7	遊び・相談・交流（広場型2カ所, センター型15カ所, 園開放型110カ所）
8	市役所による子育てサークルの紹介（17子育てサークルの情報を提供）

表4 調査対象者における公的な子育て支援事業の利用状況(カッコ内数字は表3の事業数)

No.	事業名	中山間地域(4)	市街地(8)
1	保育園一時預かり	0人	1人
4	地区の子育て支援事業（健康相談講座）	5人	0人
7	子育て支援センター（市街地・広場型）	0人	3人

調査対象者による利用状況（表4）について, K中山間地域では調査対象者の5人全員が, No.4地区の子育て支援事業（健康相談講座）に参加していた。この講座では, 親子が遊びながら, 子育ての悩みや健康について保健師などに相談していた。親にとっては子育ての悩みを聞いてもらう機会となり, 保健師にとっては親子の様子を確認できる機会となっていた。一方, K中山間地域において, その他の子育て支援事業の利用は全くなく, No.4地区の子育て支援事業（健康相談講座）はK中山間地域の母親にとって重要な支援となっていた。

市街地ではNo.1保育園での一時預かりの利用者が1人, No.7遊び・相談・交流の広場利用者が3人であった。市街地では, 多様な支援事業があり, また中山間地域と比べ距離的にもアクセスしやすいにもかかわらず, 本調査において公的な子育て支援の利用者は少なかった。

(2) 公的支援提供者側の視点

A市の市役所は, 国の方針・予算に沿い子育て支援を拡充してきた一方, 親が面倒をみるべき子育ての領域や外部者が支援可能な内容に関する親の姿勢に対し当惑している様子も見られた。また, NPOの職員は, 親に対して相互に協力する姿勢を求めているにもかかわらず, 親は支援を単に享受しようとする姿勢であると指摘している。

No.11・A市役所

「親が（子育てを）丸投げしてくる、という指摘も現場にはある。子育てはやはり親がかかわってこそその部分がある。外部化されないものがある。なんでも提供、支援すれば子育て支援になるかというところではない。どこまで踏み込むのか、現場は悩みながらやっている。」

No. 16・NPO

「だんだん支援が整備されてきたから（親は）ハングリーではない。自分たちがサークルのリーダーになりたいという人は、今はいない。」

語りの中で、具体的場面への言及はなかったが、支援サービスの提供者と利用者の中で、子育て支援の及ぶ範囲に関する認識の食い違いが起こっていた。利用者は支援を当然と考え、子育てに対する責任感や当事者意識の低下が起こっていた。

子育て支援に関して、行政と両親の間には支援サービスの提供者と消費者という関係が成立していた。両者には公的な必要と私的な願いのずれが何かという議論がなく、また親からの私的な願いを公的な必要につなげる動き（ガート・ビースタ, 2015）もないことを示していた。

(3) 利用者が感じる公的支援の必要性和利用の難しさ

では、利用者側は公的支援についてどのように考えているのだろうか。

まず、母親が地区で開催されている事業を利用したことによって、子育ての負担感を軽減させた語りがあった。

No.2・K中山間地域

「子育ては1人、夫婦だけではできない。実家、いろんな人にかかわってもらわないと、自分だけでやろうとするともう無理。最初はわりと1人でやらないと思いやっていた。自分の子どもだから自分でなんとかしなくてはと。でもきつくて、もういっかあ、（誰かに子育てを）お願いするのは悪いかな。でも、のびのび体操（地区の支援事業）も誘ってもらって（助かった）。」

No.5・K中山間地域

「ここにはのびのび体操（表3のNo.4に対応）とかがある。丁寧に親子をみてる。食事とかは同居している人が手伝ってくれるけど、時間に追われ、（子どもに）早く早くと言ってしまい、全然余裕がない。心に余裕がもてない。今日みたいに、ここに来れるといい機会だなと思う。」

また、K中山間地域の親が市街地で開催されている支援事業を利用しない理由について、施設まで距離があるため、あえて小さな子どもを連れて行かない現状も見られた。

No.2・中山間地域

「行ってみたいなあ、でも行ってない。同じくらいの人と話をしてみたいけど行ってない。ここでやっているのだから、そこまで行かなくてもいいかなあと思っている。」

No.3・中山間地域

「市街地の遊び場はいかない。人がいっぱいいるから社会性が身に付くからと思う

地方都市の中山間地域における子育てと子育て支援の特徴

けど。(子ども同士のトラブルが起きた場合)親だと、どう介入していいのかわからない。保育園だと保育士がいるからいいけど。」

「支援事業の情報は見ない。ここしか連れ出してない。まあこれでいいかなあ。連れ出したほうがいいと思うけど。ちょっと自信がない。結構なハードルがある。」

市街地で開催されている支援事業を利用しない理由として、居住地とは関係ない要因も示唆されている。

No. 1・中山間地域

「(市街地の広場型の交流場所について) グループでいけない人にはそぐわない。」

No. 6・市街地

「市街地の遊び場には、ときどき行った。でも風邪をもらってしまう。」

3.3 K中山間地域における子育てと子育て支援の特徴

K中山間地域における子育てと子育て支援の特徴は、定性コーディングの結果、(1) 保健師の見守りと地域が見守ってくれる雰囲気があること、(2) 母親が子育てで孤立せず、地域の人々とのゆるやかなつながりがあること、及び(3) 中山間地域の恵まれた自然環境の中で子育てができることの3つに整理された。

K中山間地域における公的な支援の利用は限定的ではあったが、K中山間地域がもつソーシャル・キャピタルが、公的支援を核にしながら子育てのしやすさにむすびついていることが明らかになった。

(1) 保健師の見守りと地域が見守ってくれる雰囲気があること

K中山間地域は、3歳未満児の子育てに取り組む母子を対象とした交流・学びの講座(表3のNo.4)が毎週1回開催されていた。その講座には3歳未満児を持つ親とその子が、毎回5組10人ほど参加していた。主催者の1人である保健師はその機会を利用して、親子の様子を詳しく把握していた。以下の語りは、保健師の子育てに取り組む母親への対応の様子や姿勢、またそれを母親がどう受け取っていたかを端的に示している。

No. 13・K中山間地域の保健師

「市街地の保健センターは福祉の視点で介入するが、この地域の私はそればかりではない。ひとりひとりを把握し、それを継続して見守り続けている。何かがあればどう対処すればいいかすぐに考える。たまたま私は(10年以上)移動せずにここにいるが、いつ他地域に移動になるかはわからない。」

No. 6・市街地の母親, K中山間地域から市街地へ移動

「K中山間地域の子育ては周りの力が大きい。ちゃんと先生がいてお膳立てした中に身を委ねていた。いろいろ教えてもらえる。」

また、K中山間地域の調査対象者は、地域の子育てに関する雰囲気について以下のような実感を持っていた。

No.1・中山間地域

「近所が見守ってくれている感じ。地域のおばあさんたちがよく声をかけてくれる。」

No. 2・中山間地域

「実家で産んでこっちに来ると、みんながこの子のことを、気にかけてくれる。街中だったらそんなことはない。こんなに違うのか。」

No. 3・中山間地域

「こちらは安心感がある。知らない人に声かけられるより、知っている人に声かけられたほうがいい。誰でも孫みたいにみてくれる。それが良さかな。」

No. 4・中山間地域

「子育ては親の役目。だけど地域の方は、子どもは地域の宝だと言っている。ひとりひとりの顔が見えている。かかわりがここでは出来ている。」

K中山間地域の3歳未満児の親は、保健師を中心にした地域の人々に見守られながら子育てをしていた。一方、市街地にも、各地区が主催する子育て・子育て支援事業は存在するが、今回の調査対象者に参加者はなく、また子育てに関連した地域への安心感を持つ人はいなかった。

K中山間地域には地域に対する信頼感が存在していた。ソーシャル・キャピタルの要素である地域に対する信頼感が、市街地と比較して高いことが明らかになった。

(2) 母親が子育てで孤立していない、地域の人々とのゆるやかなつながりがある

親と地域の人々のつながりについてみてみよう。

No. 14・子どもプラザのスタッフによると、K中山間地域では、3歳未満児を持つ母親同士のみならず、地域の小中学生とその親たちは、全員顔見知りであった。

K中山間地域からA市の市街地へ引っ越したNo. 6は、K中山間地域の母親たちは地域の人々とあいさつをしたり、子どもの様子を伝えあうなど、つながってはいるが、講座以外の場で一緒に遊ぶような関係ではなく、ゆるやかな関係であると感じている。

No. 6・市街地 K中山間地域から市街地へ移動

「子育てをしているからこそ、人とのつながりが身に染みる。深く付き合っているかというとなかなか付き合い方をしている。その場を楽しく、K中山間地域でも講座をやっている人はつながりを求めている。ママ友とのつながりは求めているけど、地域とのつながりを求めている。」

また、K中山間地域の中で、他の親子と積極的につながろうとしない様子は、以下の語りにも表れている。

No. 1・中山間地域 I ターン者

「声かけられたら行くけど、そんなに濃密には母親たちとはつきあっていない。」

No. 2・中山間地域

「隣市の実家とここを行ったり来たりしているから、意外に忙しい。ママ友は作らない。」

No. 3・中山間地域

「あんまりK中山間地域の友達はずるんで遊ばない。この地域の人とはあえて遊ば

地方都市の中山間地域における子育てと子育て支援の特徴

なくていい。」

母親同士は顔見知りであり、講座等における交流はあるため、母親が孤立した状況にはなっていないかった。

K中山間地域では、保健師を中心に親子や地域住民が顔見知りであり、むすびつきがあった。そこにはソーシャル・キャピタルが存在していた。一方、それらは強い紐帯の人間関係ではなく、ゆるやかなつながりであった。

(3) 中山間地域の恵まれた自然環境の中で子育てができること

K中山間地域は標高 800 メートルに位置し、冬は寒く降雪量も多い。市街地まで国道が通じているが、車で約 1 時間かかる。渓谷や水芭蕉の群生、ブナの原生林などがあり、豊かな自然に恵まれている。その中で暮らすことの利点は、以下のように語られていた。

No.1・中山間地域 I ターン者

「こんな自然はない、都会にはない。水もいい。花粉が多くても症状がない。舞い上がっても土に吸着するので。都会は舞い上がるから。東京の友達には『いい生活しているね』と言われる。ここに何人かは遊びにきてくれた。」

No.5・中山間地域

「冬に耐えたあとの春、すばらしい。下の子を妊娠し、冬につわりもひどく、春が本当にうれしかった。体調が上向いたせいでもあるが。」

「春の暖かさ、これがここの良さ。自分の体調もあるけど、ここの人は身を持って冬を過ごすから我慢強いし、思いやりもある。不満をいうこともない、ここの人は。」

また、K中山間地域における子育ての利点については、以下の語りがあった。

No. 5・中山間地域

「(市街地の友人の子どもは) だいたい同じ年恰好の子、アパートで 3 人暮らし。泣かない子どもだった。アパートの隣があるから、(隣人に迷惑をかけないように) 泣かさないように神経を使っているが、山だと (子どもが泣いても) まあいいやで済むけど。」

No. 15・子育て支援施設のスタッフ (隣接する中山間地域の施設)

「この自然の中で、五感に働きかけ、母親と (子どもが) 一緒に体験する。母性が必要な時期、父性も大事ですが。感じたもの、触ったもの、聞こえた音、この子たちは覚えていないかもしれんけど、やっぱりどこかで記憶に残る。五感が、生き抜く力になる。親子共有で。自然の中だと、密室でないので、すごくぎゃーぎゃーと言っている子どもをみて、大丈夫大丈夫、幼稚園へ行く一歩になる。市街地の広場 (表 3 の No. 7) とは違う、中山間地域の子育ての良さ、子どもの心がタフになる。いい子を育てるわけではない。」

K中山間地域の恵まれた自然環境は、子育てにとって有効であることが明らかになった。

4. 考察

本稿では、地方都市のK中山間地域において、子育ての現状と、行政等による子育て支援の現状を明らかにし、得られた結果から、利用者の希望する支援と提供者が提供している支援内容とのずれの有無を明らかにすることを目的とした。さらに、その際にソーシャル・キャピタルに着目して、中山間地域における子育ての社会化の現状を明らかにすることを目的とした。

その結果、K中山間地域の子育てにおいては、母親が子育てを中心的に担っており、子育てに関して何らかの支援が必要な時には、親族から支援を受けている現状があることがわかった。先行研究では、地方都市においては母親が中心となり、私的な領域で子育てが行われていることが報告されていたが(岩間 2004,p.168)、K中山間地域を対象とした本研究においても同様の結果となった。

また、K中山間地域の子育ておよび子育て支援の特徴としては、保健師の見守りと地域が見守ってくれる雰囲気があること、母親が子育てで孤立せず地域の人々とのゆるやかなつながりがあること、そして、中山間地域の恵まれた自然環境の中で子育てができることが挙げられた。また、それらの特徴が子育てに関するソーシャル・キャピタルになっており、さらに、それに加えて、公的な支援として、地域内に勤務する保健師の保育者への働きかけがあることで、子育てしやすい環境が作り出されていることがわかった。

なぜ、K中山間地域に子育てに関するソーシャル・キャピタルが蓄積されたのであろうか。その理由としては、第一に、K中山間地域は、地域住民の間でそれぞれの顔と名前が具体的にわかる関係が築ける人口規模であったことがあげられる。第二に、保健師が健康相談講座によって親子に積極的に働きかける機会を設けていたことも大きな影響を与えていると考えられる。保育者の語りからも、保健師が親子と地域の結節点となり、地域内での子育てに関するつながりを形成していたことが示唆された。他方で、人口が少なくお互いの顔の見える関係であることは、地域から常に注目される状態に身を置くことでもあり、母親の息が詰まる状態にもつながる可能性もある。しかし、K中山間地域の保育者が、地域からの視線を受け入れつつも、地域とのつながりをゆるやかなつながりにとどめるようにしていたため、ソーシャル・キャピタルの負の部分の影響を受けることなく、バランスをとれる状況になっていたと考えられる。そして、地域からの見守りが、子育ての安心感を得るための重要な要素のひとつとして機能していたと考えられる。また、今回の調査では、K中山間地域における豊かな自然や居住空間のゆとりという特徴が、子どもが育つ環境として優れていることが保育者から語られた。K中山間地域は冬季の厳しさや通勤通学の不便さはあるが、親子ともに五感を使いながらのびのびと暮らせる環境があることも言及された。これらのことから、豊かな自然に恵まれているという物理的な環境は、K中山間地域における子育ての大きな魅力のひとつとなっていることが示唆された。

行政による子育て支援は、子育てそのものを支援する一時預かりやファミリーサポート、交流と学びの場を提供する地区主催の催し、子育て情報の提供、子育て相談など 8 領域にわ

地方都市の中山間地域における子育てと子育て支援の特徴

たる支援活動が提供されていた。2005年の『国民生活白書』では、行政による子育て支援の戦略の一つとして「子育ての社会化」のためのサービスの充実が掲げられており、地方行政も、介護と並んで子育て支援に力を注いできた。A市でも、「子育ての社会化」の促進のための様々なサービスが展開されてきた。しかし、本調査の結果では、K中山間地域の保育者が利用していたサービスは8領域のうち1領域のみにとどまっていた。

このように、サービスが提供されているにも関わらず利用されていない理由としては、本研究の対象者が「急な保育を依頼したくても対応できる制度がない」と回答したように、利用者のニーズと提供されているサービスにずれがあることが一因であると考えられる。また、支援内容のずれは、子育ては私的な領域で行なうという認識が定着し、私的な願いを公的な必要に変換する重要性が理解されていないことから生じていると考えられる。本調査における行政の支援者の回答にあったように、支援する側は子育ての社会化を部分的には目指している。しかし、支援を受ける側は「消費者」の立場に甘んじ、社会化の必要性を認識していない。子育てという営みを通じて、公的な領域とどうかかわりを深めるか（松木,2013,p.41）という社会化への問題意識が形成されないまま、整備しやすい部分の子育て支援拡充が進んでいる現状が、A市において生じているのではないか。

また、サービスを利用しない理由としては、保育者が置かれている地理的な状況、ソーシャル・キャピタルの多寡、慣れない環境への不安な心理的な側面が及ぼす影響があると考えられる。本調査では、祖父母が同市か隣市居住であるケースが多く、支援を要請すれば、すぐに充足される環境であった。また、公的支援サービスの提供は市街地に集中しているため、緊急性がなければ、市街地の公的支援サービスを受けにいかないという状況があった。さらに、市街地でのサービス活動に参加する際には、顔見知りの親子がいない状況となるため、心理的なハードルも高かったと考えられる。

本調査の結果から、K中山間地域は地域が見守ってくれる雰囲気や、人々とのゆるやかなつながりというソーシャル・キャピタルがあるため、子育てがしやすい環境にあることがわかった。しかし、子育ての社会化に関しては、地域社会全体で子育てに取り組む雰囲気はうかがえるが、私的な領域に対してより積極的に子育て支援を働きかける活動は起きていなかった。今後、K中山間地域における子育ての社会化をさらに進めていくためには、子育てのどの部分を社会化すべきかについて、私的な支援がない場合にも注目して議論を進めていく必要がある。また、今後の課題としては、子育てに対する性別役割分業意識や間接的支援である就労支援の検討を通して、子育ての社会化の状況をさらに検討していく必要がある。

5. おわりに

本研究の検討の結果、K中山間地域における子育ては、母親が中心となり行われていたが、子育てをする親は、近距離に住む親族からの支援を受けられる状況にあること、恵まれた自然環境におかれていること、地域内の住民との適度な距離感とゆるやかなつながりがある

こと、子育てを見守ってくれる雰囲気があること、といった「子育てのしやすさ」があることがわかった。一方、本研究の対象となったK中山間地域の保育者が近距離に住む親族から子育て支援を受けられるという環境におかれていることが、子育ての際に生じる問題（私的な願い）を公的な必要として変換する「子育ての社会化」を停滞させている可能性が示唆された。

K中山間地域で確認されたような「子育てのしやすさ」は、今後、日本社会において一層の人口減少が進んでいくことが予測される中で、地方の競争優位な点として評価できる。しかし今後、人口流入のターゲットとして考えられるのは、Iターン者など親族の支援がない人である。そのため、中山間地域の「子育てのしやすさ」を中山間地域の特色の一つとして生かしていくためには、多様なニーズを持つ保育者が求める子育て支援を行政が把握すること、さらに保育者が主体性を持ち中山間地域の特色を生かしたような子育て支援の在り方を議論していくことが必要となると考える。

注

注¹ 狭義の中山間地域とは、農林統計上用いられている地域区分のうち、中間農業地域と山間農業地域を合わせた地域である。

注² インタビューがおこなえなかった6世帯に対しては、インタビュー項目にそった調査票を送付し3世帯から回答を得た。本稿では、その調査票データは直接用いてはいないが、K中山間地域の特徴を把握する参考にした。

注³ インタビューで特定の調査対象者に調査を依頼し、そこからさらに次の調査相手を紹介してもらう方法である。

注⁴ あらかじめ質問項目を決めインタビューをおこなうが、回答者の答えによってさらに詳細に話を聞く方法である。

注⁵ 質的研究における意味の解釈や分析をおこなう方法で、データを部分ごとに圧縮し、小見出しをつけて編集していく方法である。

謝辞

本調査は平成26年度信州アカデミア（信大COC事業）の地域志向研究支援により実施された。またインタビュー調査に協力いただいたA市およびK中山間地域の方々に感謝申し上げます。

文献

- 1) 松田茂樹：『少子化論』，勁草書房，p.148.(2013)
- 2) 国土交通省：「人口減少下の人口分布の現状と展望について」（2003）
<https://www.mlit.go.jp/singikai/kokudosin/kaikaku/jiritu/1/shiryo6-2.pdf>
- 3) 山田昌弘：『少子社会日本』，岩波書店，p.27.(2007)

地方都市の中山間地域における子育てと子育て支援の特徴

- 4) 国土交通省：「中山間地域の現況把握及び価値の分析」（2006）
http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/souhatu/h17seika/9chusankan/09_kokudo_03honpen2.pdf
- 5) 廣嶋清志：「地域人口問題と家族研究」, 『家族社会学研究』, 28(1), pp.56-62.(2016)
- 6) 中村真由美：「地域ブロック内における出生率の違い——富山と福井の比較から」, 『家族社会学研究』, 28(1), pp.26-42.(2016)
- 7) 立山徳子：「都市度別にみた世帯内ネットワークと子育て：都心・郊外・村落間の比較検討」, 『家族社会学研究』, 22(1), pp.77-88.(2010)
- 8) 岩間暁子：「育児コストの地域差と社会的支援」, 『少子化のジェンダー分析』, 目黒依子編, 勁草書房, pp.150-173. (2004)
- 9) 厚生労働省：「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（1994）
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/angelplan.html>
- 10) 内閣府国民生活局市民活動促進課：「ソーシャル・キャピタル——豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」, 国立印刷局 委託先: 日本総合研究所(2003)
- 11) 山口のり子・尾形由紀子・樋口善之・松浦賢長：「「子育ての社会化」についての研究——ソーシャル・キャピタルの視点を用いて」, 『日本公衛誌』, 60(2), pp.69-78.(2013)
- 12) 齋藤克子：「ソーシャル・キャピタル論の一考察——子育て支援現場への活用を目指して」, 『現代社会研究科論集』, 2, 京都女子大学大学院, pp.71-82.(2008)
- 13) ガート・ビースタ：『よい教育とはなにか 倫理・政治・民主主義』, 白澤社, p.156.(2015)
- 14) 厚生労働省：「保育所入所待機児童数」（2013）
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000042027.pdf>
- 15) A市役所：<http://www.city.nagano.nagano.jp/> (2015)
- 16) 厚生労働省：「第5回21世紀出生児横断調査」（2012）
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shusshoujib/01/d1/01-2.pdf>
- 17) 佐藤郁哉：『質的データ分析法 原理・方法・実践』, 新曜社 (2008)
- 18) 内閣府：「平成17年国民生活白書」（2005）
- 19) 松木洋人：『子育て支援の社会学』, 新泉社, p.41. (2013)

(2017年 7月 7日 受付)
(2017年 9月25日 受理)